
魔王はここに

藍猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王はここに

【Nコード】

N6573Y

【作者名】

藍猫

【あらすじ】

死んで、気付いたら魔王になってました。

・・・なんででしょう？

「そういう運命なんです！」

「誰ですか!？」

ロリ魔王が生きていく話です。

ぷろろーぐです。(前書き)

書きたいと思っていた魔王&最強系です。

気楽に読んで下さい。

ぷろろーぐです。

私は死んだ。

何もない空間の中で私は唐突に理解する。

・・・あゝあ つまんないゝ

やっと人生の楽しみ方ってやつが分り始めたのに・・・

ま、私なりの・・・だけどね

・・・暇・・・

・・・って・・・ん？

あれは・・・だーくほーるか？

え……ちょ……吸い込まれる!?

い……やああああああああ!!!!?

私は死んで、変な空間を漂って、だーくほーるに吸い込まれた。

私を吸い込んだだーくほーるは、役目を終えたように消えていき、後には何もない死後の世界の空間だけとなった。

私はこの空間で、あのだーくほーるにのまれ、別の世界に転生する ための”私”であり、別にこれは神様のミスだったりはない。だからといって嫌われているわけじゃない。ただそういう”運命”だったというだけ。

ま、私は実際そんなことは知らないのだけど。

というより

私は今、

だーくほーるの中にいる。

・・・どうしよう・・・？

ぶろろーぐです。(後書き)

ありきたりな内容でごめんなさい・・・

1話　びしょうじょです。（前書き）

話作るのにはなかなか慣れないです・・・。

ハア・・・

1話 びしょうじょです。

・・・ここはどこ？

視界が開けたら森でした。

普通の森よりも、なんていうか・・・暗い？感じの森。

にしても動きづらい・・・

私はふと自分の体をみる。

「・・・は？」

なんかちっさい・・・

手も腕も脚も・・・まさか・・・

子供になってる・・・？

というかそもそも私は死んだんじゃないかなかったっけ？

・・・私は転生した？？

・・・・・・よし。よく分かんないけど理解した。

私は唯一の自慢である並外れた適応力で今の現状に適応する。

んじゃあ今の姿にも適応しますか・・・

トテテテ と近くの湖へ駆け寄り、覗き込む。

「・・・び・・・美少女・・・」

映っていたのはまさしく美少女だった。質素な黒いワンピースを着ており、見た目は6、7ぐらいの小さな少女。それが自分とわかっていても、しばし魅入ってしまうほどの美貌だった。

「・・・なんか犯罪な気がする・・・」

この見た目で中身が18歳っていうのが。

ガサッ

「・・・誰？」

突然の草の動きに対して私は冷静に聞く。何かがいるっていうのは気付いていたから大して驚くことはなかった。

「ほう・・・。なかなか鋭いようだな。子どもとはいえ魔族ってことか。」

さっきまでこそそとしていた態度とは打って変わって、堂々と、意味ありげにニタニタとした男が出てきた。厳つい風貌で、背中には大きな両手剣を背負っている。ニタニタとした目に私は無意識にゾクツとする。

「・・・魔族？」

「あ？その黒い髪と瞳は魔族の証だろうが」

湖は少し濁っていたから色まではわからなかった・・・。

「・・・それで、なんの用？」

「・・・何って、決まってるだろう？」

男の目つきが怪しく光る。

森の中にて、

なんだか嫌な予感がします・・・

・・・どうしよう・・・？

1話 びしょうじよです。(後書き)

・・・あ

名前、まだ一度もでてませんね・・・

次ぐらいでだすと思います

2話 うそつきです。(前書き)

「どうしよう」が最後にくるようになんだかんだで頑張っています。

2話 うそつきです。

「道案内してくれ」

「・・・・・・・・・・・・・・は？」

先ほどのまでのニタニタ笑いが消え、真剣な顔で男が言う。まさか、これほど予想外なことを言われるとは思わなかった私は、10秒ほど口を開け、啞然としてしまった。

「いや、だから道案内を・・・・な？」

「・・・・・・・・いやいやいや・・・・何ですか？」

「迷ったからに決まってるだろう？他に理由があるか？」

「・・・・・・・・ないですね・・・・はい」

緊張していたことが恥ずかしい・・・・。私は脱力し、溜息をつく。そして、目線を男に戻し改めて見て、気付く。男からにじみ出る黒いもやに。またにやりとした表情になっている男は気付いていないようだ。

・・・このもやもやとした森の影響？・・・大丈夫だね・・・？

「どうかしたか？嬢ちゃん？」

男は怪訝そうに聞く。私は思いつき不安そうな顔をしていた様だ。そのことに気づき、すぐに初対面用の作り笑顔を浮かべる。

「いえ・・・特に何もありません。・・・所で、何故こんな所で迷っているんです？」

ここがどこかも分かっていない私が言えることじゃないな・・・。

「・・・ちよつと人を探してて森に入ったんだが気付いたら迷ってたんだ。」

「うそですね？」

「!！」

男の顔が驚愕に満ちる。

人を探して森に入った？こんな危険そうな森に1人で？・・・ありえない。

道案内？こんな子どもに？馬鹿じゃないの？

仮にこの森が危険じゃないとしても、その大きな剣は何のために？

おかしいことが多すぎる。それに道案内を頼むなら、何故隠れる必要がある？

・・・今なら分かる。あの男からにじみ出る黒いもやは嘘を吐いた証だと。あの男が口を開くたびに黒いもやは出ていた。あの男は嘘ばかりだ。こういうやつは嫌いだ・・・。この・・・

「うそつきっ！」

ザアアアアア・・・

黒ずんだ植物が、私を中心に枯れていった。

今だ森の中にて、

何故か怒りを表わした私の周りの植物が枯れたいきます。

・・・どうしよう・・・？

2話 うそつきです。(後書き)

・・・ごめんなさい・・・

結局名前出せませんでした・・・

しかもなかなか話が進まないです・・・

3話 びしょうねんです。(前書き)

正直ってまだ名前考えてないんです・・・

まさしく「どうしよう・・・?」ですね・・・

3話　びしょうねんです。

「うそつきっ！」

ザアアアアアア

私の咆哮と共に弧を描きながら草が枯れる。

ただ、枯れたのは地面に敷き詰められた草だけで、大きな植物や木は私の咆哮に合わせて揺れるだけだった。足元の草が枯れたことに気付いた男は、力なくへたれこむ。

「ば・・・化物・・・ひ・・・ひiiiiiiii!!」

恐怖に彩られた声野太い声が当たりにこだます。

そんな男に私は無意識に手をかざす。そして力を込めて言葉を発する。

「・・・死んで？」

瞬間、私の感情と共鳴していた周りの木々が伸び、男を襲う。

「ぎ……が……ああああああ!!」

ブシュ

その音と共に男の声が途絶える。

木々が戻っていく。そこには血一滴もなく、代わりに枯れたはずの草が広がっていた。男を養分にしたのだろう。草はどす黒い光を放っている。

「……なに？今の……」

私は今起こったことに呆然とする。あの男を殺したのは、多分私。木を操ったのもきっと私なんだろう。でもどうしてこんな力が……？

……もしかして私、転生したのは異世界？

……ならさっきあの男が言っていた魔族っていうのが私……？

「うーんややこしい……ん？」

何かが近付いていることに気づき、考えることを中断する。

ぐんぐんとすごい速さで気配が近付いてくる。

……これは3人？いや、2人か……？……来る！

ザザザアアアアア

ザンツッ!!

森の木々から出てきて影は私の目の前に姿を現す。ビュオオオと風が吹き抜ける。

出てきたのは2人。執事服の少年とメイド服のお姉さん。2人も漆黒の髪と瞳で神秘的な顔立ちをしており、その綺麗な瞳で私を見ている。

うわ・・・美形だあ・・・

座り込んだまま呆けていると、綺麗、というより可愛いらしい微笑みを浮かべた執事服の少年（10〜12歳？）が手を差し出す。

「お手をどうぞ？」

・・・やばい・・・すっごくきれい・・・。

きらきらした空間にて、

きれいな少年に目を奪われてしまいました・・・

・・・どうしよう・・・？

3話 びしょうねんです。(後書き)

主要人物はどうしても美形にしてしまう・・・

願望とかじゃないですよ？

・・・多分・・・

4話 まおうですか？（前書き）

なかなか進まない

やっと魔王についての話になってきました！

4話 まおうですか？

「あ．．．ありがとうございます．．．」

そういつて私は少年の手をとる。

少年は顔を赤らめ嬉しそうに私を起こす。

「え．．．と．．．ここはどこなの？」

さっきの男と違って心地良い雰囲気の2人は「ああ．．．」と呟き、どう説明しようか迷っているようだ。少しして少年のほう言う。

「とりあえず、我が城へ参りましょう」

「へ？城？？」

「はい。我が城．．．魔王城につっ！」

「．．．．．は？え．．．じゃあ．．．あなたちは？」

「魔王様の御付の魔族です」

・・・魔王城・・・魔王様・・・魔族・・・

ここが元いた世界じゃない・・・つまり異世界だと認めざるえない言葉だ・・・

死んで、吸い込まれて、異世界に転生した・・・と。なんでこんな事になったんだろう・・・

「・・・気になる事はたくさんあるけど、今はまあいっつか。・・・うん。その魔王城に私を連れて行って。後、この世界にのこることを教えてほしいんだけど・・・いいかな？」

前半は独り言。後半は2人に向けての言葉。

2人は快く引き受けてくれた。ちょっと衝撃的な言葉で。

「「もちろんです！！魔王様の言うとおりに！！」」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・はあ！？」

「さっ。僕におつかまり下さい！」

「へ？あ、ちょ！？」

つかまってって言うからつかまったのに、何故お姫様だっこするの！？しかもけっこう嬉しそうですね！？

「・・・って、魔王って私なの！？」

「はい！説明は後ですが・・・確かにあなたが魔王様です！僕だけじゃなく、ほかの魔族の人達もあなたの存在に気付いてると思いますよ。きっと」

「・・・何でそう思うの？」

「なんで・・・と言いますと・・・存在が、ですかね？」

「・・・答えになってない・・・」

「と、とにかく存在が魔王様なんです！あ、後、その膨大な魔力とか魅力とかですね」

「魔力？は何となく分かる・・・。けど魅力って？どう見ても私6歳ぐらいだと思うんだけど・・・」

え・・・何？この人達ってそっち系なの？うわゝ、引くわ・・・

「まあその話は後でしてくれるんだよね？そういうことならはやく行こ！」

「「はー！」」

少年の腕の中にて、

あ．．．まだ自己紹介してない．．．

4話 まおうですか？（後書き）

結局名前はまだ出てないです。

名前が出てから人物像について説明しようと思います。

5話　へんないです。（前書き）

実はテスト中でした（笑）

更新は日々遅れていくと思うので

あしからず・・・

5話 へんないすです。

「見えてきました」

少年・・・ユウの声とともに長かった森を抜ける。本名は『ユウルⅡミージュル』だと来る途中で聞いた。ユウとおよび下さいと言うから ユウ だ。もう1人のメイドのおねえさんは『メリーネルⅡリオネラ』で、メリー だ。

ゴウ

耳元で風の切れる音が聞こえる。

少し先には山のように聳え立ついかにも魔王城という風貌の城があった。この辺りは晴れることがないとかで、時折雷の光で照らされる。門の前にはごつい鎧の者が2人（そもそも人なのか？）立っている。

門の前に着くと、鎧が ガシャ と音をたてて跪く。（あ、中身いたんだ）

「よくお越しになられた・・・魔王様」

少し涙声なのにギョツとする。

「ずっと待ってたんですよ。みんな」

ユウが耳元で囁く。

「・・・そうなんだ・・・私はまだ子どもだから気は使わなくていいよ。ところで、あなた達の名前は？」

「お心遣い感謝します。私は『オルス』でございます。」

「私は『ルスオ』でございます。」

「・・・オルスにルスオ？似てるんだね・・・間違えそう・・・。ユウとメリーみたいに姓はないんだ？」

「はい。我々のような身分には姓は存在しません。後、我々二人は間違われても結構です。双子ですので。」

「だめだよ。双子だからってそんなこと言っちゃだめ！名前は大切にしないと！」

私の突然の怒りにオルスとルスオは困惑して哑然とする。だが少しして、弱弱しくもハッキリとした声で2人は私に告げる。

「「ありがとうございます！」」

私はそっと微笑み、ユウに中へ入ることを急かす。

その時の私は、ユウの言っていた魅惑の効果があの2人に効いて

いて動けなかったということには知らない。密かにユウとメリーが頬を赤く染めていたことも……。ただ私は城に入って、でかいな」としか思っていなかったんだから。

さして豪華でもない大広間の奥には階段があり、その上にぽつんと黒いすが鎮座していた。

え……。ここに座るの？　なんか本気で嫌なんですが……。

そんな嫌な予感は的中し、私はそのいすに降ろされる。座った途端に何かに覆われる感じがした。別に不快ってわけじゃないからほっておこ……。

『おお……。あんたが次のご主人様か……。まあよろしく頼むぜ……！』

頭の中に声が響いてくる。

……。多分このいすなんだろうけど……。うん！　無視！

『それはないぜ……。ご主人様……』

悲痛っぽい声が木霊した。

変ないすにて、

なんだかめんどくさそうです。

5話 へんないです。(後書き)

少しずつ書く量を増やしていきます・・・

後、これは自分の思うままにやっているので、

話がおかしかったりすると思います。

・・・暖かい目で見守ってくれると嬉しいです・・・／／／

6話 なまえです。(前書き)

26, 27日はボーイスカウトでキャンプでした。

・・・寒かったので、風邪気味です・・・。

地味に書く量が増えていますので・・・

6話 なまえです。

「ユウ。このいす・・・なんなの？」

肘掛をトントンと叩きながらいすを示す。

「？ そのいすがどうかされたのですか？」

あの頭に響いてきた声は私にしか聞こえていなかったようだ。多分このいすは何かが特別なのだろう。

「・・・頭の中に話しかけてきた・・・？」

うまく言葉にできず疑問系になってしまった。・・・いつものように頭がまわらない・・・。見た目だけじゃなく中身まで子どもになったという感じ・・・？

「・・・声・・・。そのいす———グリムゾンの声ですか？」

「そのグリムゾン・・・？ かは分かんないけど、多分。」

「グリムゾンの声は魔王様にしか聞こえないと云われています。あなたが魔王であることがハッキリしましたね！」

私は ふくん とグリムゾンを見まわす。

・・・魔王専用ってことか・・・けっこう凄いんだ・・・

『けっこうじゃねー！めちゃくちゃ凄いんだー！！』

・・・心読まないで・・・？

「ところで魔王様」

「なあに？ユウ？」

「もう少ししたら、ここにこの国のトップが集まります。まあ魔王様のお披露目みたいなものなんですが・・・嫌な態度をとるやつ・・・方がいるかもしれません、よろしくお願いします。」

・・・ユウさん・・・今一瞬素がでかけてたよ・・・？

「お披露目って・・・情報はやいんだね・・・」

ぽそつと呟く。

・・・そういえば、他の魔族の人達も気付いてる みたいなことを言ってたっけ？直感ってやつか・・・？

『魔族ってのは仲間には敏感なんだよ。人間とは違ってな』

・・・ん？予想はしてたけど、やっぱり人間っているんだ・・・。
というより、魔族って仲間思いつてことか？・・・意外。

少ししてからユウが話しを続ける。

「それで・・・名前のことなんですが・・・」

ふーん？名前がどうし・・・あ！！

私、まだ名乗ってないじゃん！？人に聞くだけ聞いて・・・！

「ご、ごめん！私、まだ名乗って・・・」

「それでいいんです！」

・・・つまり名前なんか知りたくない？・・・心にひびが・・・。

「そ、そんな顔しないで下さい！そういうことじゃないんです！魔王様にとって真名まなとはとても大切なものなんです！だからそんな軽々しくお教えしてはだめなんです・・・」

少し泣きそうな顔をした私にユウは慌てて補足する。その様子にメリーが反応し、ユウを軽く睨みながら「・・・ばか」と呟いたのでユウは俯いてしまった。そしてメリーがユウの後を引き継ぎ、説明の続きを言う。

「魔王様は代々転生者だと聞きます。ですので魔王様の真名まなは前世と現在の2つを御持ちということになりますね。」

「・・・2つ？」

「はい。あるはずです。もうひとつの名が・・・。」

「ユウとメリーには教えてもいいの？」

「え・・・あ、はい。あなた様が信用できると信じて下さるなら・・・」

今までキリッとしていた顔を綻ばさせたメリーの微笑みはとても綺麗だったと言っておこう・・・。

「・・・ん・・・この世界での名前・・・」

フツと頭の中に浮かんだコトバがあった。

これが私の名・・・？

「フェノリネルⅡユレイシア」

王の広間にて、

真名^{まな}を知ると魔力が溢れ出てきました。

・・・どうしよう・・・？

6話 なまえです。(後書き)

なにか悪いところなどは感想でお伝えいただくと

嬉しいです・・・

頑張ってなおしますので！

7話 『ゆるる』みーじえる (前書き)

今回はユウ視点です。。。

そろそろ違う人目線でいこうとおもっていたので・・・

7話 『ゆるるⅡみーじえる』

「フェノリネルⅡユレイシア様・・・」

魔王様が・・・フェノリネル様が名をお教えくださいました。

嬉しいです……。ぼくを親しい者として受け入れてくださったことが……。

そんな歓喜に震えているとフェノリネル様の辛そうな声が聞こえてきた。

「あ・・・熱い・・・よお・・・」

「!? どうなさいまし・・・ぐっ・・・!」

異変を感じ、すぐに駆け寄ろうとする、が・・・

「近づけない?・・・っ これは魔力!？」

まさか真名まなを知ったことで奥に眠っていた魔力が暴走した!? しかもぼくやメリーが近づけないほどの魔力とは・・・

パリパリ

電気のような痛みが全身を打つ。

「フェノ・・・魔王様！これは魔力です。落ち着いて抑えてください。」

「・・・これが魔力・・・。んん・・・。」

魔力が暴走すると本人にも辛いもの。なのにフェノリネル様は眉を顰めつつも凜とした凛々しい顔で冷静に対処している。

その光景がどうしても美しく見えてしまう。

見惚れているのはぼくだけでなく、メリーも同じようだ。

少しして、魔力を肌で感じないほどに凝縮されていき、フェノリネル様へと吸収されていく。

「・・・うん。感じは掴めた。」

フェノリネル様の声が辺りに木霊す。

「だ・・・大丈夫ですか？フェ・・・魔王様？」

ぼくより一足先に現実に戻ったメリーはフェノリネル様に聞く。

「うん！全然平気ー。あ、後名前で呼んでくれていいんだよね？なんか魔王様　って呼ばれるのなれてなくてさ・・・。フェノリネルは長いから『フェノ』がいいかな。」

さっきまでの重い空気が台無しのような、明るく、無邪気な声で

フェノリネル様が言う。

無邪気な声と無邪気な笑顔とは裏腹に、微かに向けられる殺気。無駄に時間は取りたくないのだろう。

なら、わざわざ時間を取れることはしないのがぼくたちのやるべきことだ。

「「わかりました。ぼく／わたし の主、フェノ様」」

その言葉は誓いの言葉。

すべてをささげ、尽くすという示唆。

それが魔王様に仕えるために生まれ、そしてその魔王様に惚れたぼくの精一杯の誠意。

現れるかも分からない魔王様の御付に選ばれたとき　なんでぼくが・・・　なんて思っていたことが、優秀な家系だからと過度に期待され何度も死にそうになったことが、今のぼくの忠誠の前では霞んで見える。

「ふふ・・・ありがとう」

フェノ様が綺麗な漆黒の目を細め、笑う。今までに見せたことのないような笑顔・・・ぼくはこの無垢な笑顔のために・・・ぼく・・・

・『ユウル＝ミージュエル』はすべてをささげる・・・

「あなたの為に・・・」

7話 『ゆるる』みーじえる』（後書き）

というわけでユウのフェノに対する思いを主にしました・・・。

とにかく 忠誠を誓った ということを

分かっていただけでも十分デス

8話 うざいです。(前書き)

たまに間違っている字などを

直してます・・・

誤字が多くてごめんなさい・・・

8話 うざいです。

「私はあなたに決闘を申し込む!!」

「えゝ……。いやゝ……」

私の不満そうな声に決闘を申し込んだ男……カイルⅡバーサド（15歳くらい）が奮闘する。

まわりにはそれを面白がって見ている者、それを利用し私を見定める者、私に許しを乞おうとあたふたする者、私か男を心配する者が、わらわらとうろついている。

……。なんでこんなことに……

それは少し遡って約1時間前、私がお披露目の準備をしている時のこと。早めに到着したと思われる貴族の1人息子が私が魔王だと知らずに話しかけてきたことから話は始まる……。

廊下の向かいからやってきたこれまた美少年。瞳は金色だが、髪

は私と同じように漆黒だ。

・・・やっぱ魔族だよね？

ふと目が合い、男が話しかけてきた。・・・これが始まり。

「おい。お前」

「ふえ？私ですか？」

「お前意外に誰がいる？ このちび」

かっちーん

「・・・あなたはどなたですか・・・？」

「俺を知らないとは・・・どこの餓鬼だ？ちび」

ぷち

「あのう・・・さっきから何なんですか？一体・・・」

「今日はとても大切な式典の日だ。餓鬼はとつとと家に帰りな。

ハン」

ぶちっ

「あーもー・・・。少しは人の話を聞いてはどうですか？それともあなたはあれですか、人語も理解できないくらいばかなクズ虫ですか？あ・・・それだと『くず』と『虫』に失礼ですね・・・

。　　・ ・ ・ 少しは反論ぐらいしてはどうですか？ 残念坊ちやま？」

久しぶりに溜まっていたいらいを発散したからか、口調が大分荒くなってしまった・・・。

綺麗な、誰もが美しいと思うような純粹無垢な笑顔で吐いた暴言は、男にはすぐに理解することはできなかったようだ。しばし目を瞬かせ少しずつ顔が赤くなっていく。

・ ・ ・ 理解おそく・・・。

「くくっ！ なんっだとこのちび！！」

「っ！ また　ちび　と言いましたね！？ このくそ虫！！」

「だれがくそ無視だっ！」

「あれ！？ まさかの字が違う！？ やっぱりばかなんですね！？」

そこからは完全に売り言葉に買い言葉・・・

1時間も2人でギャーギャーとお互いを罵倒し合った。

気付けば式典に来た人達に囲まれ、

「私はあなたに決闘を申し込む！！」

「えく・・・。いやく・・・」

という展開になっていた。

完全に自業自得なのだけど・・・。

魔王城の廊下にて、

めんどくさそうです。

8話 うざいです。(後書き)

展開的には次は決闘になると思います。

・・・戦闘シーンは苦手ですが頑張ります！

9話 けっとうです。(前書き)

初めての決闘シーンです。。。。

9話 けっとうです。

「なんでこんなことに・・・（パート2）」

魔王城の大きな庭。そこで私は私に決闘を申し込んできたうざい男・・・もとい、けっこう高い地位のバーサド家の1人息子、カイルⅡバーサドと相對している。

なんか周りの人達が囁し立てて決闘することになってしまったんだ。

・・・ああ、めんどい・・・。あ、本音が。

「フェノ様!!」

ユウとメリーがやっと騒ぎを聞きつけてきたようだ。

「・・・遅い」

「す、すみません・・・。

話は聞きました。バーサド家の馬鹿息子・・・もとい1人息子のカイル様と決闘するとか?」

ユウよ・・・。私はもうつつこまないよ・・・。

「うん。なんかそういうことになった。・・・だめだった・・・」

今更になって2人が反対するのでは？ と不安になって聞く。

が・・・

「いえ。全然いいです。ぼく、正直カイル様は嫌いなので。」

「はい。私もいいです。あの男言い寄ってきてうざいので。」

・・・なんて息の合いようだ！ 字数がピッタリなんて・・・。

「・・・まあ2人がいいのなら私は思う存分に殺^やるよ？」

「「はい！お願いします！」」

「・・・ハア。・・・と、そういうわけだから始めましょうか？ カイル様？」

・・・『やる』についてはつつこまないんだ・・・？

そう言って今まで放置していたカイルに目を向ける。向こうは今の話は聞こえなかったみたいで、眉を顰めこちらを見ていた。

「ああ・・・。決闘についてだが、ルールは1つのみ。『勝敗は降参することで決める』だ。」

・・・では、早速始めようか。」

ルールがシンプルに1つ ということに少し驚いたが、これが魔

族の中の暗黙のルールなのだろう、と無理やりに納得する。実際はもっといろいろあるのが普通なのだが。

私とカイルはしばし見合う。そしてどちらからともなく殺気を放ち、それを引き金にカイルが動く。

轟っ！ という風の音と共に猛烈な勢いで私に迫る。手にはいつの間にかに握られていた剣の矛先が私に向いていた。

「・・・フッ！」

速さとしては数秒。その短い時間の中でカイルは剣を何度も突き出し、私に攻撃をしてきた。だが、私はそれらを難なく避け、自分の体の小ささを利用して向かってくるカイルの懐に入り込んだ。その滑らかな動作には無駄がなく、流れるような動きにカイルは驚愕の色に彩られた。

「つつ!？」

「・・・遅い！」

私の動きに反応し避けようとするカイルに一喝をいれ、カイルの腹に容赦のない一発を叩き込む。

ゴッ と濁った音が響く。

「ぐ・・・がっ！」

カイルは体を前屈みに折り曲げ地面に倒れこむ。

「お・・・おおおお！」

周りの観客（？）たちが歓声を上げた。

・・・うるさ。

貴族たちの中心にて、

カイルがピクピクと痙攣しています。

え
・
・
・
これ
・
・
・
・
どうしよう
・
・
・
?

9話 けっとうです。(後書き)

一瞬の決着です。

正直長引く戦闘シーンは苦手なので

これからが心配だったりします・・・
(汗)

10話 ころはく・・・いえ・・・ろりこんです。**(前書き)**

意外と考えるのが大変でした・・・。

10話　こくはく・・・いえ・・・ろりこんです。

「く・・・くそお！」

「・・・へ？」

倒れて、痙攣してピクピクしていたカイルが勢いよく立ち上がる。しかし私が間拔けな声を出したのはそのことに驚いたからじゃない。カイルの中で黒い靄のようなものが渦巻いていたからだ。

・・・うそを吐いたときのとは違う・・・魔力か？

カイルは上半身を起こし、言葉を発する。

「《燃え盛る炎の力よ・・・
　　^{ファイヤーボール}＜炎の玉＞》！！！」

カイルの周りに5つの赤黒い玉が出現し、カイルの手の動きに合わせて一斉に飛び掛かってくる。

「ちよっ、まっ！私、まだ魔法は————。」

そう私はまだ魔法は使えない。

・・・てかまだこの世界に来て5時間も経ってないんですけど!?

炎の玉は四方から飛んでくる。

「—————い、やああああ!」

私の絶叫が当たりに轟き・・・

ボシュン

炎が消えた。

「・・・はい?」

恐る恐る目を開いた私と、今起こったことが理解できないカイルの声が見事にはもった。

いや、実際はその場に居るすべての人の声が・・・だが。

「な・・・何が起こった・・・?」

「魔法が消えただっ!?!」

「どういことだ!?!」

誰にも分からないらしくザワザワと騒がしくなる。

「・・・これが魔王としての私の力・・・？」

そう呟いた声が皆の耳に届いた。

シン・・・

「?どうしたの皆？」

私が魔王だということは全員知っていると思っていたから、私にはこの静寂の意味が分からなかったのだ。まあ中には数人ほど『やっぱりな』と頷いているが・・・。カイルに至っては、それはもう今にも顎が外れそうなほどに口を開け、ワナワナと震えている。

「・・・え、ま・・・魔王様？」

「・・・? うん何？」

やっと声を絞り出したカイルは私の返事を聞くと呆然とどこか遠くの方を見つめた。

・・・おい。いろいろと大丈夫か、こいつ・・・

そしてふと何かを決意したように私を見つめる。そしてふー・・・ふー・・・と深呼吸したかと思えば・・・

ガッ

今までにない速さで私に近付き、肩を掴む。

「っ!?! な、何!?!」

「！ 何をするんですか！ このくそカイン！！」

「ユウ！ もうちょっと言葉に気をつけようよ！？」

ユウの本性（？）に今の状況を忘れ、つい全力でつつこんでしまった。

・・・だってこの世界にきて1番驚いたんだもん。

「俺の・・・俺の一目惚れは間違いじゃなかったーーーー！！」

本性の現れたユウをも無視した絶叫が辺りに木霊した。

「「「「「は？」」」」」

様子を伺っていたはずの観客たちが声をそろえて、しかも哀れみの目をカイルに向けていたのは当たり前のことかも知れない。だって告白の相手は魔王なのだから。

そして私は一言・・・

「・・・ロリコン」

最上級の笑顔で、きっちり侮蔑の目で。

それを聞いたカイルと、駆け寄ろうとしたユウ&メリーが凍りついたのは余談であるとか。

哀れな人達の前にて、

これは告白されたのでしょうか・・・？

10話　こくはく・・・いえ・・・ろりこんです。（後書き）

タイトルを『こくはくです。』か『ろりこんです。』の

どっちにしようか悩んだので、

混ぜてみました（笑）

11話 『かいる＝ばーさん』

「・・・ロリコン」

そんな不名誉極まりない言葉を呟く少女がいる。

俺の目の前に。

それは貴族である俺にとってとてつもないほどの侮辱だ。

いつもなら怒り狂い容赦なく魔法を無差別に放つところだ。

だが、俺はしなかった。

今日の昼頃、魔王様が生まれたのを俺は肌で感じた。父上は気付かなかったようで、俺の話を聞き、直ぐに城に確認をとった。普通、魔王様の存在を感じ取るには膨大な魔力と素質、そして魔王様との相性が良くないと無理らしい。

俺は途轍もなく喜んだ。貴族でのプライドとして、魔王様と肩を並べる資格があることに。

直ぐに一部の魔族で式典を行おうらしい。式典といってもご飯を食

べるだけだが。

俺は子どものように（まだ15歳だが）胸を熱くわくわくしながら城に行った。

そこで少女にあった。

その少女は幼いながらも美しく、途轍もない存在感を放っていた。そして純潔の魔族の証である漆黒の髪と瞳。少女の居る空間だけが異様な空間のように感じた。

ふと、そのあどけない表情をこちらに向けた。

・・・目が離せなかった。

それと同時に、心をどうしようもない様な熱いものが覆った。

・・・知りたい。傍にいたい。欲しい。笑顔が見たい。話したい。

様々な欲望に包まれ、俺は兎に角『行って欲しくない』と、強く、思った。

・・・ああ・・・これが人を好きになる、ということなのか・・・？

いや・・・そんなはずはない！だって相手は子どもだぞ！？

「おい。お前。」

気付いたら声を掛けていた。

この少女の前では弱いところを見せたくない と

ついつい以上に悪い話し方をしてしまったことを俺はその時とも後悔した。だが、今では後悔していない。

直ぐに口論となり汚い言葉で罵り合い、決闘になり（自分から申し込んだが）、挙句に見事に負けてしまった・・・が、少女の言葉で俺は間違ってたなかった と気付くことができたからだ。

相手は魔王様なのだから見た目は関係ない という単純かつあほくさい理由なのだが・・・。

だから、決闘後（告白後？）の

「・・・ロリコン」

という言葉に固まってしまった。

近寄ろうとしていたユウルのやつまで固まっているのを見たところ、ユウルもこの少女・・・この方に心を寄せているんだろう。うん。

昔からユウルとはライバル関係だったが（主にユウルが上）、こんな状況でもライバル関係になるとは・・・。

だが、俺は負けない。

いつか俺・・・『カイルⅡバーサド』はこの方と共に歩む。

いつまでも俺は・・・

「あなたと共に・・・」

11話 『かいる』ばーさど』（後書き）

と、いうわけで

別視点第二弾です。。。

だいたいカイルの一人称は『俺』ですが

決闘を申し込むときは1人の貴族として

申し込んでるので『私』を使ってます。。。

説明が遅れてすみません・・・

12話 つまりはなぞってことです。

「それではフェノ様。そろそろこの世界について説明させていただきます。」

「・・・やっとか・・・」

決闘・・・否、一部の魔族たちへのお披露目から一週間が経った。

あの後、しつこいカイルをなんとか宥め（だれかが）、無事に式典をすることができた。式典といっても、ユウが言っていたように、トップの魔族だけだったのだが。住民たちには魔王の存在は伝えるがお披露目はしないらしい。・・・まあ理由は簡単で、私がまだ『王』として未熟だからだそうだ。

式典が終わり、この世界のことについて聞こうとしたら・・・

「フェノ様はまだここに来て間もないです。ですからもう少し慣れてからお教えしますよ。」

とユウにやんわり断られてしまった。

・・・なら何故式典はあんなに早かったんだ・・・

「それで・・・何について知りたいですか？」

「んー・・・。まずは『魔王』についてかな？で、次はこの世界について・・・大陸とか種族とか魔法とか・・・ね。」

「わかりました。ではまず『魔王様』についてですが――――」

ユウが説明を始める。

『魔王』・・・それは魔族、魔獣、バンパイア、悪魔 などのような闇に関わりのあるすべての頂点に立つ存在。しかし、もともと『魔王』とは存在しないものだとか。急にこの世界に生まれ、魔族や魔獣たちを纏められる存在として『魔王』になるという。

「・・・急に生まれる・・・？」

「はい。生まれる、というよりは存在する、という方が合うと思います。」

・・・存在する？よく分かんないな・・・。

「あ、そういえば。この前メリーが『魔王様は代々転生者』みたいなこと言ってたような・・・？」

『おー。確かに言ってたなー。』

「ちよっと黙っててよ。グリムゾン。」

急に話し出すいす・・・もといグリムゾンに呟く。

・・・存在忘れてたな。

「？グリムゾンですか？」

「うん、そうだよ？ユウ。」

ユウが何かを考えるように俯く。

「・・・転生についてはグリムゾンに聞いたほうがいいかも知れません。」

「・・・どうして？」

「グリムゾンは今までの魔王様について知っているでしょうから・・・。」

・・・それもそうか。

んじゃあ教えて、グリムゾ・・・

『無理。』

・・・ええ。

『今までのご主人様は前世のことが話せないように靄がかかっていたんだ。俺にもこれ以上話せないように靄がかかってる。』

・・・つまりは謎ってことだな。

うわぁ〜……。全然使えないよ〜こいつ。

『……ひで〜』

この異世界にて、

つまりは謎ってことです。……全然わかんない。

・
・
・
どう
し
は
う
・
・
・
?

12話 つまりはなぞってことです。(後書き)

世界についての説明を書くはずだったのに

魔王についてで終わってしまった・・・

なんということでしょう・・・。

13話　せつめいです。（前書き）

12話の続きの説明が主です。。。

13話　せつめいです。

「では次は世界についてですね。」

魔王についての説明は有耶無耶な状態で終わり、世界についての説明が始まった。

魔王の説明のときは質問したからなかなか話が進まなかったので、今回は質問しないつもりで静かに聞くことにした。

まず、種族について。

この世界には『人間』、『魔族』、『エルフ』、『悪魔』、『バンパイア』、『魔獣』、『聖獣』、『亜人族』、『精霊』などの様々な種族が存在する。大まかに善とされている『人間、エルフ、精霊、亜人族』と、悪にされている『魔族、悪魔、バンパイア、魔獣』・・・そして、中立とされている『聖獣』、という風に分けられる。

種族を善と悪に分けられているのは大陸のつくりにも関係する。

この世界は大きな1つの大陸から成り立っており、ちょうど大陸の真ん中の辺りで右と左・・・せいたいりく聖大陸と魔大陸またいりくに分かれている。瘴気が渦巻く魔大陸またいりくに住むことができる種族は、穢れている（人間談）

ということから魔族や魔獣は「悪」とされている。当然差別もある。

・・・うわ、人間うぜ・・・あ、私元人間か。

『聖獣』は中立とは言ったが、正直気まぐれなだけ。味方したい人には味方するし、嫌いな人はとことん嫌う。『精霊』は気に入った人、もしくは者に力を貸す。主に人間。『魔獣』は知性がなく、食べるために人間を襲う。もちろん魔族も。だいたい話せる魔獣は『聖獣』と呼ばれ、魔獣よりも圧倒的に強く、
押められている（主に人間に）。

『魔族』と『人間』の違いは3つ。

1つ目、見た目の違い

魔族は目か髪、もしくは両方が漆黒。また、人によっては耳が尖っていたり、牙があったりする。

2つ目、体の構造

作りは同じだが身体能力や魔力の量、魔法の使い方などが違う。身体能力も魔力の量も魔族のほうが人間より断然多い（もともと、その力に嫉妬した人間が人間と魔族の種類を分けたとか）。魔法の使い方の違いは、魔族は自分の中の魔力を魔法に変えて使い、人間は魔力を契約して精霊に渡して、精霊に魔法を使って貰う　という違いだ。

3つ目、感情の違い

同族であろうと殺してしまう人間とは違い、魔族はとても仲間思いで愛情が深い。その反面、魔族は敵には容赦がないという習性を持っている。

「・・・説明はこんなところでしょ。」

ユウがふうと息を吐く。

「ありがとっユウ！」

ギユウ

抱きついてみた。だっていろいろ知れて嬉しかったし。

愛情表現は必要だよね！

「・・・フェノ様・・・」

ユウは微笑みながら頭を撫でる。

・・・よかった。ユウがあっち系の人じゃなくて・・・。

途轍もなく失礼なことを考えながら私は眠る。

明日は魔法の使い方を教えてもらおう。その為に頭を整理しないと・・・。

だって私の体は子どもなんだよ？睡眠は大切だよね。

夢の中にて。

グリムゾンの声が響いて五月蠅いです。

・・・どうしよう・・・？

13話 せつめいです。(後書き)

ということで、

次からは魔法についての話になると思います。。。。

1話 まちです。(前書き)

すいません(汗)

魔法についてにしようとしてましたが
先に進みました。。。

1話 まちです。

異世界に来て2年が経った。

え？早い？ いいんだよ・・・多分。

この2年間、魔族の人達が新しい王のことでの混乱が治まるまで外に出られなかったが、別に暇じゃなかった。

魔法の練習したり、こっそり城を抜け出したり（勿論秘密で）・・・

というわけで今から街へ行くんです。この前ユウにばれて酷い説教されたけど・・・忘れたな（笑）

ま、行く前に許可を貰うことと魔王だと隠すことが条件でOKされたが。

「こんにちわー。マリさん。」

街の市場で歩く、優しそうなおばさん・・・マリさんに声をかける。私が初めて街に来たときに良くしてくれた人だ。茶色の髪と漆黒の瞳が妙に似合う人だ。

「おやおや。こんにちわ。今日も元気かい？ フェノちゃん。」

「はい！今日も元気です！」

「おう！嬢ちゃん！今日も来たのか！」

「こんにちわ！ジルさん。」

「おやゝフェノちゃん！」

「おーフェノちゃん。」

わいわいと私の周りにおじさんやお婆さんやらが集まってくる。
集まってくるのはこれだけに留まらない。

「あ！フェノちゃんだー！」

「ほんとだ〜！あそぼ〜。」

「・・・フェノおねいちゃん。」

「おー。フェノじゃん！」

私と同じくらいの子達が男女問わず近付いてくる。

「うん！一緒にあそぼっかー。レーノちゃん、ミニちゃん、ルンちゃん、レクト君。」

話しかけてきた順番に名を呼ぶ。

みんな眼か髪のどちらかが漆黒だ。だが私のような両方漆黒な人は少ないらしく、

何故か人を惹きつける魅力があるらしい（ユウに聞いた）。

私は周りのおばさんたちに「じゃあね」と言って子どもたちと広場へ走っていく。

「・・・子どもなのに素直でいい子だねえフェノちゃんは。」

「ああ。まるで自分の子どものような錯覚に陥ってしまうよ。」

「私たちは全員家族もみたいなもんだろうが。」

あっはははは。集まった人達は朗らかに笑いあった。

私が見せる一面がどれだけの人々の心を和ませているか、私は知らない。でも、

その一面がすべてではないことは私を含め全員が知っている。

だってもともと魔族は戦いに飢える種族なのだから。

「今日はどうするの？昨日みたいに小さな魔獣と戦う？」

「うん！ちいさなまじゅうになら勝てるもん！」

「・・・レーノちゃん。今日はまほうのれんしゅうしたい。」

「ルンちゃん。それはこんどにしよう。私は弓のれんしゅうしたい。」

「みんなー。今日も森にいきましょう。」

上から私、レーノちゃん、ルンちゃん、ミニちゃん、レクト君の順だ。

魔族は戦いを好むもの。例えそれが小さな子どもであろうと。

そして私も。

「じゃ、今日も森に行こ！」

フンフーン♪楽しみだなあっと！

1話 まちです。(後書き)

レーノ 種族..バンパイア 性別..女 属性..火

メモ..性格は明るく、男勝り。髪はオレンジ。瞳は漆黒。

ミニ 種族..悪魔 性別..女 属性..風

メモ..間延びした話し方で、いつものんびりしている。

髪は銀色。瞳は漆黒。

ルカ 種族..魔族 性別..女 属性..水

メモ..気弱そうな話し方だが気は強い。

髪は漆黒。瞳は水色。

レクト 種族..魔族 性別..男 属性..闇

メモ..活発で直ぐに首を突っ込んでくる。

髪は漆黒。瞳は紫。

2話 てんろうです。

「んじゃあ、今日も行ってくるね。」

「はい。フェノ様。」

ユウに軽く告げ、今日も街へ行く。

「あ、フェノネリア様。」

門でルスオに呼び止められた。

「最近魔獣が活発に行動しております。お気をつけ下さい。」

「魔獣が？・・・ん。分かった。んじゃあね。」

元気に手を振って街へ向かう。

・・・魔獣がね。レーノたちが危なくないように先に確認しとこうかな・・・。

カクツ と行き先変更し、森へ向かう。

「強いのがいるといいのになあ♪・・・ん？なんか早速おっきな魔力発見！

魔獣か？魔獣なのかっ！？楽しみー！！！」

口元をニヤアと歪ませる。

これだけ強いなら本気、出して遊べるかも♪

「ここっ！」

ガサツ 髪に草を付けたまま魔力の元へ。

で、そこに居たのは・・・

「・・・聖獣!？」

でした。

綺麗に靡く銀色の毛。神々しいオーラを放ち、澄んだ空気を漂わせるような

美しい姿。そして光を宿した漆黒の瞳。

ユウに教えてもらった、正しく聖獣——天狼の子だった。てんろう

うわー。想像してたより断然綺麗……。それに下が赤くて凄く
際立つ……。って、赤？

確かに赤だけど……。って、うん？まさか、血いいいい!？

天狼は下の方を赤く血で染め、じっと動かない。

早く治さないと——

「《この者の傷を癒したまえ・・・＜癒^{ヒール}し＞》！」

ボウウウウウ

頭を膝の上に乗せて、魔法によって光った手を傷口に乗せる。
まだ子どもだったおかげで普通に動かすことが出来た。

ただ子どもだからこそ、大分衰弱しきっていたが。

「————くっ！」

治らない！？いや、治ってる。治りが遅いんだ！

このままじゃ間に合わない。

せっかくの遊び相手を死なせてたまるか！

『治れ！！』

魔法でもなんでもない言葉に辺りが震えた。

そしてその言葉と共に傷が塞がっていく。

「・・・え？」

天狼の激しかった呼吸が落ち着き、穏やかになっていく。

「・・・さっきの私の言葉・・・魔法じゃなかったよね・・・？」

でも魔力を帯びている言葉だった。

「・・・なぞだね。」

私の声が虚空に響く。

「おい！フェノちゃん！」

「フェノちゃん。いる？」

「・・・あ、みつけた。」

「おっ！ほんとだ！」

いつもの四人の声に顔を上げる。

「あれ？みんなどうして此処に？」

「・・・フェノちゃんの魔力をかんじた。・・・私、魔力よくかんじるから。」

魔法を主に使うルカは魔力探知が上手いみたいだ。

魔族とはいえ魔力を感じれるのはそれなりの魔力がないと無理らしいのだが・・・

（勿論私もできるが）ルカを含め、この四人は大分優秀みたいだ。

「あれ！？そのおかみはなに？」

「ああ・・・この子はね・・・」

私の遊び相手♪ だよ！」

救うことが出来た、私の遊び相手。

・・・早く成長してね♪

私が楽しむ為に・・・♪

2話 てんろうです。(後書き)

2章から書き方を変えてみました。。。

・・・難しかったので(汗)

更新日や書き方、キャラの性格とかよく変わると思いますが、
見てくださってありがとうございます。。。

3話 しじとはいやです。

「どう？ユウ。」

「なんとも言えませんが、傷の方は大丈夫でしょう。」

「ほんとっ！？よかった。」

そう言って私は小さな狼——天狼を撫でる。

この子と出会ってから一週間が経つが、天狼は今だ目覚めない。

連れて帰ったときは目を丸くして驚いていた。まあ、滅多に見ることのできない聖獣を・・・

しかもその子どもを連れて帰ったのだ。誰でも驚くだろう。

傷だらけだったのは他の生き物（聖獣）に襲われたからだと言ウは推測した。

親に守られているはずの子どもが一人なのは、襲われたときに殺されたからだろう、ということも・・・。

「ふんふーん♪ まだ目覚めないかな。」

「？なんでそんなに目覚めて欲しいのですか？」

「なんでって・・・遊び相手候補なんだもん♪」

ユウが目を見開き、僅かに冷や汗を？く。

神とも詠われる聖獣を遊び相手になんて・・・

みたいな信じられなそうな表情だ。

「まだ、子どもですよ？」

「成長を待てばいい。」

「怪我してますよ？」

「もう治ったんでしょ？」

「・・・親がいるかも知れませんか？」

「なら親と遊ぶ♪」

「・・・ハア。分かりましたよ。成長するまではここで飼いまし
よう。」

諦めない私にユウは溜息を吐き、妥協する。

でもねユウ？

「ユウ。私は飼ったりなんかしないよ。一時的に保護するの。」

私の真面目な真剣な表情にユウはたじろぐ。

私は飼ったりなんかしない。だってそんなことしたら・・・

弱くなるかもしれないでしょ？

それだと困るの。だから今は保護するだけ。
そりゃあ、聖獣には聖獣の生き方があるから、邪魔したくないって
いうのもあるんだけどね。

「あ！フェノちゃん！あの子のようすはどう？」

「だいぶ調子が良くなってきたよ。」

「・・・きょうはどうする？何して遊ぶ？」

「あ！ごめん。今日は私用事があるの！」

「・・・？なんかあんのか？フェノ？」

「・・・うん。とっても嫌なことがあるの。」

四人が不思議そうに首を傾げる。

私は「じゃあね」と皆と別れ、城へと帰る。

・・・ハア。行きたくないな・・・。

「「さっ、魔王様♪お仕事ですよ♪」」

いつになく不穏な笑顔をするユウとメリーに、私は絶対に逃げられないことを悟った。

二人はいつも私のことを『フェノ様』と呼ぶ。

だが、私が魔王として仕事をするときには必ず『魔王様』と呼ぶ。今、二人は私のことを『魔王様』と呼んだ。

つまり二人が言いたいのは・・・

『仕事をしろ』

・・・だ。

「・・・この山のような紙屑、早くゴミ箱に捨てて欲しいんだけどなあ。」

書類という名の紙屑をね・・・。

「駄目ですよ、魔王様。最近遊んでばかりだったんですから。」

「そうです！ さあ、さっさと終わらせてくださいね？そして私たちの仕事も——こほこほ。」

ユウ・・・確かに私は遊んでた・・・。

でもさメリー？メリーはただめんどくさいだけなんじゃないかな？
しかもその咳は誰がみてもわざとどしか思えないんだが・・・。

「・・・うう。帰りたいたい・・・。」

「どこに帰るんですか？魔王様♪」

「・・・うう・・・。」

このドS共があ！！！！

3話 しごとはいやです。(後書き)

一応魔族はなかなか年をとらない種族なので
おじさん、あばさんといっても
見た目は全然若い設定です。。。

4話 え・・・ゆうしゃです。(前書き)

話のテンポを早くします。。。

4話 え・・・ゆうしゃです。

「はい、これ。ボアおじさんの言ってた薬草だよ。」

「おお。いつもありがと！ でもさ『おじさん』は止めてくらないか？

中身はもう100歳ぐらいだが、見た目は20代なんだから。」

「んじゃあね。また何かあったら言ってね！おじさん♪」

私はそう言い、くるりと背を向けて タタタ と駆けていく。

後ろで「うう」という呻き声が聞こえるが勿論無視！！
おじさんはおじさんじゃないと変な感じがするんだもん。

「フェノちゃん。またおてつだい？」

「うん♪」

「・・・えらいね。フェノちゃんは・・・。」

「・・・いつもいろんな人のためにうごいてて。」

だって魔王にとって魔族の人たちは家族みたいなものだからね♪

民の為に働き、慕われてこそ『王』でしょ？それにここの人た

ちは好きだし♪

上機嫌で皆と歩いていると会話が聞こえてきた。

「そういえば、魔王様がお生まれになってもう2年ね。」

「しかもその魔王様は日々私達の為に尽くしてるって噂だよ!」

「魔王様の中の魔王様ね。一度お会いしてみたいわ!」

「まだ未熟らしいけど、きっと良い方だろうね。」

・・・なんでだろう頬が赤くなる・・・。

「・・・?　ねえー『まおーさま』ってどんなひとなの?」

レノちゃんが話してる人たちに聞く。他の三人も知りたそうにそわそわし出す。

「ああ。魔王様っていうのはこの魔大陸の王様だ。私達魔族にとつては『もう一人の親』のようなとても大切な人だよ。」

「そうなの?　会ってみたいなー!」

「・・・わたしも。」

「んー。わたしも。」

「あ、おれもおれも!」

四人がきやいきやいと騒ぎ出す。

私は温かい目で見守り――

「フェノちゃんは？」

はい。爆弾投入――

「え、うん。私もだよ。」

にこつ　と皆に笑いかける。

え・・・自分に会いたって・・・言ってから恥ずかしいんですけど？

四人は複雑な心境でいる私に気付かずに魔王の話に没頭する。

最初に話してた人たちも、魔王がどんなに凄い人かについて熱心に語っていた。

・・・そーいえば、そろそろ国民達にもお披露目する　とかユウが言ってたっけ？

ボー　と一人で物思いに耽っていると、精霊の気配がした。

「・・・どうしたの？」

私は誰にも気付かれないように呟く。

その声に反応し、　ボウウ　と光り、黒紫色の光の玉が近くに姿を現す。

姿を現すといっても見えているのは魔王である私だけなのだが。

この光の玉——闇の精霊は唯一この魔大陸で生まれる精霊だ。
人によるが、この闇の精霊と契約を結ぶ魔族もいるとか・・・。

『来るよ。』『人間。』『目的。』『魔王。』『城。』『街。』
『嫌い。』『魔族。』

片言でたくさんさんの精霊が話しかけてくる。

まとめると・・・

『嫌いな人間が魔王を倒しに城を目的にしていたが、街に来る』
と、いうことだろう。

迷惑な・・・。

「人間が・・・勇者がくるぞおおお!!」

一人の魔族の叫びが辺りに轟いて。

・・・勇者・・・か。

なんで直接城に行かないんだ？

・・・さてどうしようかな。

4話 え・・・ゆうしゃです。(後書き)

まともな魔王様の仕事の始まりですね。

5話 われは、まおうです。(前書き)

なんか勇者の話、書きにくい・・・。
というより難しいです・・・。

5話 われは、まおうです。

「退きなさい！この魔族風情がつ！！」

女性の声と思われる少しトーンの高い声が響いた。

魔族達はそれを聞き、動かず、向かってくる一行を睨む。

勇者一行・・・

誰もが直感的に理解した。

一行は、金色の瞳と金色の髪を持つ青年を中心に街へとずかずかと入ってきた。

勇者と思われる青年、魔法使いと思われる女性、僧侶と思われる男性、そして、勇者と共に

戦うと思われる剣士の青年・・・。

その一行の勇者以外の三人は魔族達を嫌そうな侮蔑の目で見ていた。

・・・気に入らない。

街中を歩くそいつらを見て、私は不機嫌になる。

真っ直ぐに城へ向かわず、わざわざ街へ来るなんて……。

馬鹿にしようとしている様にしか見えない。

「……子ども達。家の中へ……。」

ついさっきまで盛り上がっていたあばさんが私達を急かす。

四人にも勇者には勝てないことが分かるのだろう。決まり悪そうに家に入っていく。

仮にもあいつらは勇者一行だ。

ある程度強くないと、ここに来る前に死んでいるだろう。

「フェノちゃん。あなたも早く。」

「私は大丈夫だよ？」

「！駄目だよ。早く家に——」「きゃああああ！！」……！
？」

勇者一行の一人……魔法使いの女性が魔族の少女を蹴り飛ばした。

「マリテナっ！！」

「お母さん！！」

少女……マリテナを庇うように女性が躍り出た。

「魔族のくせにお母さん？ 気持ち悪いのよ!!」

魔族達の殺気が勇者一行に集まる。

だが、誰も手は出さない。否、出せないのだ。

勇者だから。勇者だから、魔王じゃないと駄目なんだ。

それほどに強いから、手は出してはいけない。

それが魔族の中の暗黙のルール。

人間たちはそれを『魔族は勇者に手がだせない』と勘違いしている。

だから女性は魔族に容赦しなかったのだ。

どうせ手が出せないのだから、と。

それを理解し、私の中で何かが弾けた。

「ねえ、お姉さん♪」

「……なにかしら？ 無粋な魔族の小娘。」

私が声を掛けたのに驚いたのは、そこにいた全員だった。

「じょ……嬢ちゃん!？」

「何してるんだ!？」

「フェノちゃん!」

魔族のおじさん、おばさんが心配の声を上げる。

くす。心配してくれてありがと。でも大丈夫だよ♪

ふう　と深呼吸して女性を・・・勇者一行を睨む。

「ここに何をしに来た。」

先ほどの無邪気な雰囲気とは打って変わった空気に、シンと辺りが静寂に包まれる。勇者一行に至っては、圧倒的な殺気を放たれ、全員が冷や汗を？いて息を呑んだ。

それを確認し、声を掛けた女性に視線を向ける。

「貴様はしてはいけない事を我の前でした。この罪・・・受けてもらおうか。」

『死ね』

それは死の宣言。

私の力を帯びた言葉は全員の耳に響き渡り、女性を死へと追いやった。

どさり

力なく倒れた女性を見、死んだのだと納得させられた。勇者一行以外は。

「なっ！ 貴様何をした！？」

「魔族は我らに手出しできないはずだ！」

僧侶と剣士が叫ぶ。

「魔族なら・・・な。」

我が名はフェノネリア。

この魔大陸を治める王—— 『魔王』 だっ！

私は高々と宣言した。

勇者一行は絶句し、魔族達は酔いしれたように紅潮としていた。

・・・名乗っちゃった♪怒らないでね、ユウ♪

5話 われは、まおうです。(後書き)

フェノのときは『私』

魔王のときは『我』

で行こうと思ってます。。。

『我』・・・変ですかね？

あと、『一行』とか感じ間違っていたので
直しました(汗)

次の更新は少し遅くなるかも知れませんが
悪しからず。。。

6話 よわいです。

・・・上手くいった・・・。

周りが絶句している中、私は興奮していた。

天狼の傷を治したときのように、魔力を帯びた言葉が命令となつて相手に届いたことに・・・。

いやあゝ・・・。やろうと思えばできるもんだねゝ。

顔には出さないように心がけていたが、それに反し、私の口は弧を描くように

不気味に歪んで笑っていた。

勇者一行はそれを余裕がある　と誤解して一歩退く。だが、勇者だけは一歩前に踏み出した。

「・・・私は勇者だ！ここでお前を討ち取ろう！！！」

「断る。」

断固拒否だ。

いやいや・・・そんな『何故だ！？』みたいな顔しないでよ。討ち取るゝ殺す　じゃん。殺されるの嫌に決まってんじゃないか。馬

鹿か、お前は。

「くっ・・・なら今っ!!」

何が『なら』だよっ!?

それにここで暴れないで。ここは私の大切な街なんだから。

勇者は チッ と舌打ちし、腰に差してある剣を引き抜き、振り翳す。

「・・・ユウ、メリー。」

私の声に反応し、私の前・・・勇者の前に闇の玉が二つ現れる。
それは徐々に（実際は一瞬）人型をかたどり、ユウとメリーの姿になった。

ユウが勇者の手を蹴り、剣を落とさせた。

カシャン

剣を落とした本人には何が起こったのか分からず、私と、突然現れた二人を何度も見比べる。

残りの勇者の仲間たちも周りの魔族達も驚いていた。

「あ・・・あれはミージェル家の息子とリオネラ家の娘じゃないか!!」

「っ! ユウル||ミージェル様とメリーネル||リオネラ様!？」

・・・あ、魔族たちの驚く理由は勇者たちとは違ったみたい・・・。

てか『様』付けで呼ばれるほど凄かったんだ。こっちが吃驚だよ。

「・・・まあいいか。　ねえユウ、メリー♪」

私の呼びかけに二人が片膝をつき跪く。

これは私が『魔王』のときには普通のことだ。

「どうかされましたか？魔王様。」

メリーが顔を上げ、凜とした表情で聞いてくる。私はにっこりと笑い『お願い』する。

「この人達・・・殺して？　私はめんどくさいの。」

そんな物騒な台詞は、無邪気な笑顔を浮かべる私には何故か似合っていた。

誰もが台詞の意味を理解しながらも私に見惚れていた。

魔族の皆も、見慣れているはずの二人も、勇者たちも。
そして木も、鳥も、空気も、精霊も・・・誰もが、ね。

「「はい。魔王様の手は煩わせません!!」」

その言葉と共に二人が動き、勇者たちに襲い掛かり・・・終わら

せた。

実に呆気なく。

ドサドサドサ・・・

事切れた三人に私は冷たく冷酷な声で告げる。

「醜く醜悪で、愚かな人間共。死の中で己の無価値さを思い知るのだな。」

・・・にしても弱っ。まさかあんなに呆気なく終わるとは・・・。
君らには恐れ入ったよ（別の意味で）。てかユウとメリーに普通に
勝つ私って一体・・・。

「ところでフェノ様？」

ユウの優しい声に　ゾワリ　と悪寒が走る。

ナンデダロウ？嫌ナ予感シカシナイヨ？

「・・・な・・・何かな、ユウ？」

「お披露目はまだ先だと言いましたよね？何のために準備をして
いたと思っていたんですか？

お披露目の際に混乱が起きない様に、と頑張っていたというのに・・・
・まさかこんな街中で、

こんな目立つ所で暴露するなんて……。ぼくの苦勞は一体何だったんでしょかね？フェノ様？」

ユウの説教はそれから一時間続いた。この人目の多い街中で。

しかも満面の笑顔で。

気付けば周りの者たちが微笑んでその光景を見る始末。

た……。助けてくれえ……。・

6話 よわいです。(後書き)

ユウは結構腹黒・・・？

おかしいな。

もっと純粹キャラだったような・・・

7話　さいなんです。

「……で、何これ？」

部屋を埋め尽くすほどの手紙を前に私は呟き、昨日の事を思い出す。

昨日……勇者達を片付けたユウに連れられ、私は街の人たちとろくに話もせず城へ連れ戻された。街の人たちは呆然としていたから話せなかったのはしょうがなかったのだけど。

そして何だかんだで自分の部屋に戻り、一人で寝るには大きなベツドに入った、と……。

で、目を覚ましてみれば手紙が山積みになっていた　というわけだ。

「あ、起きましたか。フェノ様！」

メリーが両手で抱えるほどの手紙を持って、私の部屋に入ってきた。

「……何なのこれ？」

「ああ・・・これはですね・・・ら・・・ラブレターです／＼／」

「・・・は？」

・・・ラブレターだとう？

「その・・・昨日のことでフェノ様のお住まい（城）がばれてしまい、前から心を寄せていたという男共が城に手紙を持って、殺到したんです・・・。」

「・・・」

この・・・ロリコン共がああああああ！！

何！？魔族はロリコンしかないのっ！？カイルみたいな！！

「ええとですね・・・。数としてはこの魔大陸の未婚の男性のほとんど、ですね。」

「・・・グハッ。」

どんだけ私にいいいい！！？

「・・・メリー。」

「はい？」

「焼き払って。」

「はい♪ 《不潔な男性共の心を燃やし尽くせ♪ <清純の炎>」
ファイヤ

ボオオ!!

私の言葉にメリーは笑顔で答え、それ呪文としていいの？ と聞きたくなるような呪文で手紙を燃やし尽くした。まあ口に出して言えば内容はどうであれ呪文として使えるのだが。別に、イメージが出来ていれば無詠唱でもいけたりする。勿論私は無詠唱でもOK、と。

「ところでフェノ様？ 手紙とは別に届いているプレゼントの方は・・・。」

「使えるやつ以外は燃やして捨てて。」

「かしこまりました♪」

手紙は使いようがないがプレゼントならあるだろう。

もらえるものはもらうよ♪ 後は知らない♪

そして私は自分がこれだけ好かれているということを忘れて街へと向かった。

・・・結果。私は馬鹿だった。

「魔王様っ!!」

「魔王様っ!!」

「魔王様っ!!」

「.....」

どうして私は街へ来てしまったのだろうか.....

街の人たちは私を見るがいなや群がった。

ろくに動けない状態で私は立ちすくむ。

でもまずは.....呼び方を戻してもらわないと.....

「.....えへと?みんな?」

「「「「はい!!」」」」

「.....(汗)。その、何時もどおりでいいんだよ?」

「だ、駄目ですよ魔王様!」

「そうです!」

「あなたは魔王様なのですから!!」

「.....」

その皆の親しみの目を見てしまうと邪険に扱うことも出来ず私にはどうしようもなかった。

「だ、だから私のことは何時ものように・・・。」

「駄目です!!」

「・・・うう。何時ものように・・・。」

「」「駄目です!」「」

「・・・えええ・・・。」

長い長い話し合いによって、やっと私のことを『フェノ様』と呼ぶことに収まったのは既に日が沈んだ後だった。

レーノ達には会うことも出来なかったよ・・・。

しかも帰りにはストーカーにも会うし・・・。(泣)

災難な一日だった・・・。(泣)

7話　さいなんです。（後書き）

フェノネリア
魔王は皆に好かれてます（笑）

もともと街の人たちはフェノネリアという名は知らず、
フェノだと思っていたんですね。

だから本当の名を知ること的魅力に当てられてしまった人たちも
居るわけです。。。

8話　ともだちです。(前書き)

今回はだいぶ今までとは違う書き方です。。。

8話　ともだちです。

「・・・私たちはよわい。」

「うんゝ・・・。このままだとゝ・・・。」

「・・・まもれない・・・でも、」

「なんとしてでも俺たちは・・・」

「」「」「まもりたい!」「」

＊
＊
＊

「・・・レーノちゃん! ミニちゃん! ルカちゃん! レクトくゝん!」

シーン

「・・・皆どこ行ったの・・・?」

何時もの集まり場所の噴水広場。

其処に皆が居ると思っただけだったが、皆どころか一人も居なかった。

・・・何時もなら待っていてくれるのに・・・。

はっ。もしかして私が魔王だって隠してたから？

それとも本名を隠してたこと・・・？

「・・・はあ。しょうがないか・・・。」

嘘を吐いていたわけではないが、騙していたのは本当のことだし・・・。

「・・・よし。開き直ろう！　というわけで・・・帰りますか！」

くるり　と回転し、来た道を引き返す。

前世からの順応力は未だに健在のようだ。

私は悲しみながらも、次は何をして遊ぼうかと笑っていたのだから。

「あ、めんどくさいな・・・。魔法で帰るか・・・」
《瞬間移動
テレポート》
「！」

しゅん。　素っ気無い音と共に私は城へとテレポートする。

結構な上級魔法だったりするが私は知らなかったりする魔法だ。

「・・・はい？」

城に帰った私はユウの話を聞いて絶句した。

「ですから新人希望者ですよ。フェノ様。」

「・・・何の？」

「城で働くメイドと騎士のです。」

「・・・誰が？」

「レーノ、ミニ、ルカ、レクトの四人です。まだ子どもですがなかなか育てがいがある子達なのですが・・・えーと・・・お知り合いですか？」

「「「「よろしくおねがいします！フェノ様♪」」」」

「・・・と・・・友達。」

「・・・ああ。フェノ様が探しておられた・・・。」

にこにこ笑う四人は、ここ一週間会えなかった、あの四人だった。

実は私が魔王だと分かったとき、四人はただ驚くわけではなくショックを受けたらしい。

それは魔王だと隠していたことで受けたショックではなく、この力

差では『守ることができない』
という、主従関係的なことで。

四人は私の本当の名を知ると同時に声が聞こえたという。

『魔王の力となれ』

と。

その謎の言葉は何故か心地良く、満たされるような安心できる声
だったらしい。

そしてその言葉は四人の生きる意味を示した言葉だという。

まるで神の御告げのような・・・。

「・・・それで、私の力となるため——私を守るために一週間
話し合って、
その結果、城で働こうと・・・？」

「」「はい♪ フェノ様♪」「」

「・・・あなた達はそれでいいの？ あなた達は自分の生きたい
ように生きたらいいんだよ？
それに・・・そんな縛るようなこと・・・。」

「ちがうよ。フェノ様。」

レーノちゃんの声がいつも以上に凜と響く。

「!？」

「私たちはフエノ様のもとではたらきたいの。」

「・・・ミニちゃん・・・。」

「・・・もちろん、私たちのいしで・・・。」

「・・・ルカちゃん・・・。」

「そうだよ。俺たちはそのためにここにいる。」

「・・・レクト君・・・。」

「フエノ様は私たちのあるじでかぞくでもだち、そしてとってもたいせつな人♪」

「・・・レーノちゃん・・・。」

レーノが一步前に出て跪く。残りの三人もそれと一緒に膝をつく。

「私たちがいつまでも魔王様とともにいることをおゆるしく下さい。」

四人は微笑みを浮かべて私を見つめる。

そこにあるのは純粹な忠誠心と、曲げられない強い意思だった。

「・・・レーノちゃん、ミニちゃん、ルカちゃん、レクト君。

・・・いや、レーノ、ミニ、ルカ、レクトよ。

貴様らは生涯もって我に尽くし、我に全てを捧げ、私の為に力を使い、どこまでも付いて来れるか？」

「「「はい!」「」」

「・・・では強くなれ。我を守り、嘗められないぐらいに、強くっ!」

「「「っ、はい!」「」」

「・・・ここに、破れぬ契約を———!」

8話　ともだちです。（後書き）

と、いうわけで主従契約しました　ということになります。。。

内容的に残酷な場面はないんですが・・・、
皆さんはどういうような場面が好きですか・・・？

9話 『てんろう』 (前書き)

天狼視点です。。。
名前も決まります。。。

9話 『てんろう』

《・・・ここは？》

「ここは魔王城だよ。狼さん。」

誰も居ないと思っていたから、返事が返ってくるとは思いませんでした。

しかもこんな近くでは・・・。

《！！ 何者！？》

天狼^{てんろう}として、こんな近くの者に気付かぬはずがないというのに。

「えーと・・・私はフェノ、だよ。」

そこにいたのは美しく、愛らしい少女だった。

キョトン とした仕草がその愛らしさを一層強調する。

だが天狼すら気付けない気配・・・それは無に近いほどに弱いかもしれない。そして、無に近いほど弱ければ私の気に当てられて

既に気を失っているはず。だが、この少女は気を失うどころか優しく微笑んでいた。

それは少女が自分より強いという事だ。

しかもその少女から敵意は感じぬし、敵意を出そうとも思えない。それどころかこの少女と居れる事を歓喜に感じ、懐かしくも心地良くも思えた。

《・・・はっ！ いやそんなはずが・・・。》

「何が？」

《お主を見て心地良くおも・・・って何でもないわ！》

「・・・つつこまれてもなあ・・・。」

ハアハア と息を吐き、ふとさっきの言葉を思い出す。

《・・・そういえばお主・・・フェノといったか・・・。先ほど魔王城 と・・・？》

「？ うんそう言ったよ。どうかした？」

《我は何故ここに・・・？》

「怪我をして森にいたんだよ？ 覚えてないの・・・？」

《怪我・・・そういえば我は逃げておったんじゃないか・・・。やつから・・・ドラゴンから・・・。それで、傷を・・・。》

「ふん。ドラゴンから……。ところで傷はもう大丈夫？」

《うむ。傷は完治しとる。お主が治してくれたのか？》

「まあね。」

《！！ それは真^{まこと}か！？》

「……そうだけど……？ どうして？」

《治癒魔法は上級魔法で、人間には途轍もなく難しいと聞く。しかも、あの傷を治すとは……。お主は一体……？》

「あー。そもそも私人間じゃないよ？ ここは魔王城なんだから、人間はいないよ。」

《そ……そうであったか……。しかし種族はどうであれお主は命の恩人。

それ相応の礼をしたいのじゃが……。？》

天狼の誇りにかけて恩人を無碍に扱ったりはしない。

人間ばかり見ていたおかげで、そう強く思うようになった。

人間の醜悪さや醜さを見ていたおかげで……。な。

正直、この少女にもいい思いを持っていない。

種族は違えど、あれらと同じ、人の形をとっているのだから……。

しかし、少女は違った。

「んじゃあ、私と戦って♪」

《・・・は?》

「もともと助けたのは遊び相手に丁度良かったから。・・・まあ別に断ってくれてもいいよ。」

その斜め上な答えには呆然とするしかなかった。まさか『戦え』とは・・・。

《・・・ク、ハハハハハハ!!》

突然笑い出したからか少女はキョトンと首を傾げる。

人に笑うなど何年振りだろうか?

ましてや格上の少女に隙を見せるなんて・・・。

面白い。

《我は今は完全ではない。だからその要望は断らせてもらおう。》

その言葉と同時に少女が シュン とうな垂れる。

《代わりに・・・契約をしてくれ。》

「・・・え?」

《我はお主を気に入った。そもそも命の恩人じゃしな。
それに・・・契約したら、いつでも戦^{あそべる}えるぞよ?》

ニヤリと妖しく笑って言った。

しかし、それを聞いた少女は・・・

「・・・言っただね?」

と自分以上に妖しく、美しい笑みを浮かべて言った。

ゾクッ　と恐れと美しさを同時に感じたのだった。

「では、契約、しようか♪　あ、そうそう私さ魔王なんだよね♪」

《へ?　・・・ま・・・魔王!?!?》

にこにここと笑う少女を見、《ミスったあああああ!?!?!?》
とつい心の中で叫んでしまった。

「ふふふ♪これからよろしくね、ランフォン♪」

しかも既に名前決定iiiiiii!?!?

前途多難な予感がするぞよ・・・(汗)

9話 『てんろう』（後書き）

天狼の名前は『ランフォン』です。

フェノと出会ったときは小さかったですが、目を覚ましたときは、フェノを乗せれるぐらいの大きさになっています。

怪我で体が小さくなってただけで、

大きいほうが本来の姿、というわけです。

・・・一応、オスです。

ついでに、既に100歳超えています。

10話 じいじとくです。

「——と、いうわけで・・・天狼てんろうのランフォンだよ♪」

魔王城の王座——グリムゾンに座りながら、私は、隣にいるランフォンを皆に紹介する。

「「「・・・てんろーっ!!!」」」

《グハァ!!》

はしゃいだレーノ、ミニ、ルカ、レクトの四人がランフォンにダイブ。

天狼は聖獣だ。勿論、結構有名な。子どもでも凄いということが分かるほどに。

「フェ・・・フェノ様・・・急に診察所に行くからどうしたのかと思いましたか・・・。
起きたんですね。その天狼。」

ユウが吃驚とした表情で呟く。

「そー。なんか起きるような感じがしたからー。
あ、それとさっき契約したよ。この天狼・・・ランフォンと。」

「感じて・・・って、契約!？」

「天狼と契約したんですか!？フェノ様!？」

「そ、そうだけど？どうしたのメリーまで・・・？」

「天狼はプライドが高く、重度の人系の種族嫌いなんですよ!？それに、契約するということは『従う』ということでもあるんです!・・・まさか天狼と契約することができなんて・・・。

流石魔王様!　やはり私の主は凄いです!　私の目に狂いはありませんでした!」

メリーがきらきらとした面差しで私を見つめる。

・・・契約!!従う　かぁ・・・。

ん?　ランフォンから契約を申し込んだから・・・ランフォンが私に従うってことか・・・?

・・・なるほど。　流石私。

「・・・まっ、いいや。　ランフォン。　体が完全な状態になるまでは一緒に森で遊ぼっか。」

・・・と、いうわけで、今から行こう。今すぐ行こう。」

《う・・・うむ。　しかしその前に・・・。》

「ん?」

言いよどむランフォンをチラッと見る。そのランフォンといえば、四人に押しつぶされて身動きがとれずに、腕をバタバタと助けを求めている。

「・・・天下の天狼ともあろう者が何をしているんだかね。」

溜息と共に呟く。

冗談のつもりで言ったことだが、ランフォンはそれでもズサツと心にくたらしい。

四人の押しつぶしからの抵抗を止め、軽く私を睨む。

《今は戦うつもりがないだけなのだ！ その気になればここにいる者になんぞ負けん！》

ランフォンがハッキリと自分の強さを意思表示する。

だがその言葉は、この場に居る者すべての者の（私以外の）空気を変えることになった。

「・・・聞き捨てなりませんねランフォンさん？」

「それは私どもへの挑戦と受け取らせていただきます。」

最初はユウが。次にメリーが、黒い笑顔でランフォンに言う。
それに便乗し、残りの四人も反応した。

「・・・まけないよ？ ランフォン！」

「・・・かくごしてね〜？ ランフォン〜？」

「・・・殺^やる・・・。」

「勝負だ♪勝負だ♪ なっ！ランフォン？」

《え・・・ちょ・・・？フェ・・・フェノ様！！？》

異様な空気をやっとの事で理解したランフォンは顔を引きつらせながら私に助けを求める。

でも、これは自業自得。なので・・・

「がんばれ♪」

《フェノ様あああああああ！！？》

「・・・行きます！」

《待てえええええ！！》

真剣になったユウが飛び掛り、それを引き金に、戦いが、始まった。

そこから響く悲鳴から『魔王城での小さな戦争』と呼ばれる事件になったのは、また別の話・・・。

10話 じごくじとくです。(後書き)

この戦いの決着は謎のままにしておきます(笑)

ランフォンは100歳越えてますが、

天狼にとってはまだ子どもです。

自業自得になったのは若気の至りってやつですね(笑)

1話 たのしみです。(前書き)

いきなりの章変え・・・予告もなしですいません。。。

1話 たのしみです。

「・・・魔王に相応しくない？」

私の不機嫌な声が王の間に響く。

何時もより暗くなっている王の間にて。私が座る王座へと続く階段の下には一人――白く、長い髭を生やした60歳くらいの爺さんが居る。そこに漂う空気は決して良好とはいえないただならぬ思ひ空気が流れ続けていた。

「はい。そうです。魔王殿。あなたは魔王に相応しくない。それが我らバンパイア一族の声であります。」

言い方は丁寧だが、友好的とはいえないぶっきらぼうな言い方で爺さんが言う。

しわがれて掠れた声から年老いていることが窺える。

「なっ、何を言うんですか！？バンパイア一族全員が認めないって!？」

横に控えていたユウが驚きの声を上げる。

「黙れ小僧。」

「っ!!」

即座に返された静かな威圧の籠もった声にユウはグッと口ごもる。
ユウは俯いて少し震えていた。

「・・・はあ。落ち着きなさいユウ。・・・それでどうしてそういう事になった？」

バンパイアの隠れ里の村長——ゼアロウヤーマーシルよ。」

・・・なんて言い難い名前なんだろう・・・。

グリムゾンに肘を付きながら緊張感もなく心の中で呟く。

『おいおい・・・（汗）。自分が馬鹿にされてるってのに・・・。
お気楽だね・・・。』

・・・黙れ。グリムゾン。心を読むな。

・・・あれ？なんで私はグリムゾンにはこんなに強く当たってしまったんだろう？

ああ・・・。うざいからか・・・。うん。そうだな。

『・・・ヒデエ（泣）。』

「どうして・・・ですと？ 聞く前にまずは姿を見せることぐらいしてはどうか？」

姿すら見せないあなたを、認められなくても不思議ではないと思いますが？」

そう。私は姿を見せていない。グリムゾンによって。

現在私は、グリムゾンから生えるように出ている、大きな対の翼に覆われている。

そして私は、重なった二つの翼の間からゼアロウヤを見下ろしている、と。

「・・・姿、ねえ・・・。そんな事言っても困るですよ。我はただ世間には姿を見せていない身。それに、この翼はグリムゾンが勝手にしていることだ。」

「・・・左様か。だが、我らはあなたを認めない。話は以上だ。」

もう話はない、と爺さんは闇と共に姿を消した。

《・・・どうするのだ？ フェノ様？》

「どうするって・・・別に何もしないけど・・・？」

グリムゾンの隣で様子を窺っていたランフォンが聞くが、私は静かに答える。

《しかし・・・それでは・・・。》

「気にしないでランフォン？ それと皆？ 私だって別に馬鹿に

されたまま引き下がるつもりはないんだよ？　ただ、今は手を出すつもりがないだけ。」

「・・・？　どういふことですかフェノ様？」

ユウが怪訝そうな表情で聞く。

「私は争いが好きだけど仲間内の争いは嫌いなもの。だから戦争になるかも知れない引き金を引くつもりはない。」

「・・・」

「私は楽しいことが好き。だから、私は楽しくしながら、なんとかするよ。」

その場に居た者は全員、私の言う意味が分からなかった。しかし、楽しみながらなんとかする　という意味は数日後に分かることになる。

「バンパイアの隠れ里・・・か。　楽しみね♪」

その私の嬉しそうな小声はグリムゾンだけが知っている。

1話 たのしみです。(後書き)

今回の章は展開をゆっくりめにするつもりです。。。

2話　さんねんぶりです。

「・・・と、いうわけでバンパイアの里に行くよう。」

「・・・すいません。何が『と、いうわけで』なんですか？ 全然理解出来ません、フェノ様。」

ユウが額に手を当てて溜息を吐く。

今はあの『魔王城での小さな戦争』から一年・・・つまり、私がこの世界に来て三年が経つ。

・・・私、生まれたてじゃん。まだ三年じゃん。

で、バンパイアのジジイ・・・失礼、お爺さんが来たのは一週間前になる。

「で、何故急にバンパイアの隠れ里へ？」

隠れ里といっても、ただ山々の間にあったり、山奥の中にあったりと、見つけにくい場所にあるから

『隠れ里』と呼ばれているだけだ。別にわざわざ隠れているわけではない。

バンパイア一族だけではなく、悪魔の一族も同じように村がある。まあ、似たようなものらしいけど？ 行った事ないし知らない。

「ほら前言ったでしょ？ 私は楽しく、なんとかするって。」

「・・・はあ。」

ユウが よく分からない と首を傾げる。まあ、分かりにくいように言ってるんだけど。

「とにかく行くの！ 行くのは私、ユウ、ランフォン、レーノよ。」

「わ、分かりました。 ですが・・・どうしてレーノまで？」

「レーノはバンパイアだからね。居たほうがいいと思って。」

「メリーは連れて行かないんですか？」

「メリーは・・・ほら、ミニやルカ、レクトの世話があるし・・・それに・・・私の仕事を・・・ね？ やってもらおうと・・・。」

レーノ、ミニ、ルカ、レクトの四人はメリーに世話を任している。もともと四人には親がないし、メリーは母親代わりに丁度いいのだ。

ついでに強くなるための修行と、メイド、騎士としての訓練も兼ねている。

そしてメリーを残す何よりの理由は 『仕事』

・・・だってめんどくさいんだもん。それにメリーは手際がいいし。

「・・・ですが、今のバンパイアの里に行くにはフェノ様は目立ちますよ？」

「クス。だいじょーぶ♪ バンパイアに紛れ込めたらいいんじゃない？ 策はあるわ♪」

「・・・凄く心配なのですが？」

「あー楽しみ♪ バンパイアの里！」

「・・・無視ですか・・・。はあ・・・。」

「心配しないでユウ。聞こえててやったんだから。」

「尚更タチが悪いです！」

ユウが怒った♪・・・いや・・・呆れてた。

そんな他愛無いことを話していると、扉の方から足音が聞こえ、思わぬ侵入者が来た。

「お久しぶりですっ！！ 魔王様！！！」

バン と扉を五月蠅く開け、嬉しそうな大声（凄く迷惑）を上げ

た男は、
すぐさま王座の前まで詰め寄り、跪く。

ユウと私はきつと途轍もなく嫌そうな顔をしていただろう。

いや・・・していたに決まっている。

男は私の手を取り、口付けしようとしたので振り払っておく。

ついでにユウが蹴り（さり気なくとび蹴りだったが見なかったことにした）を放つ。

男・・・侵入者・・・いや、不審者は吹き飛ばされたが、直ぐに元の位置に戻り、
改めて頭を下げ、礼をする。（その満面の笑みはやめて欲しいな・・・）

「・・・ハア。で？ 何をしにきたの？ カイル？」

不審者、もといカイルは嬉しそうに顔を上げる。

「話は聞いたぞ！ 俺も一緒に行こう！！」

きらきらとした目を私に向けて言い放つ。

三年振りに会ったと思ったら、いきなりこれですか・・・。

うん。 ちょー迷惑♪

『・・・カイル、お互い苦勞するな・・・。』

ころころ。共感するなグリムゾン♪

2話　さんねんぶりです。（後書き）

出した方がいいが出番のなかったカイルです（笑）
正直、急に出すことになりました〜！

3話　じょそうです。（前書き）

女装ですね。。

3話　じょそうです。

「ここがバンパイアの隠れ里・・・。」

昼なのに、木陰によって薄暗く不気味な雰囲気を漂わせる森で私はポツリと呟く。

私達の前には、脆そうだが実際はとても丈夫な塀と、開きっぱなしの扉があった。

前には兵すらも居ず、誘っているような気がした。

「・・・そうです。ここがバンパイアの隠れ里の一つ・・・『バルニト』です・・・。」

不満そうな声での説明は、肩まである銀色の髪で、黒のスカートを穿いている美少女(?)の言葉だった。

「・・・プツ。似合いすぎだよユウ（笑）」

「!　うう・・・。」

そう、この美少女はユウだ。髪は鬘だ。

何故こんな格好をしているかというと、理由は簡単。見たかつ

たから（笑）。

・・・ていうのは冗談で・・・私が魔王だとばれない為に、お爺さんに顔を見られているユウには変装してもらうことになったのだ。

勿論私も変装している。髪を水色にしてみたんだけど。

後ろに居るカイルは普段着なのには、ユウ・・・怒ってたなあ・・・。
クツクツク・・・。

ああ・・・笑いが悪っぽく・・・魔王だしかな？

「・・・フェノ様？」

「ふふふ・・・ん・・・へっ？」

「・・・何か企んでましたか？」

「ま・・・まさか」。

やばいやばい・・・。笑いが漏れていた（汗）。

「・・・ところでユウ。私は今、『ルナ』だよ？フェノって言わないで。」

「ぎ・・・ごめんなさいフェ・・・ルナ様。」

・・・心配だ。途轍もなく心配なのだが・・・。

私達は他のバンパイアの隠れ里から御忍びで来た貴族（？）という事になっている。

ユウとカイル、レーノは私の従者で、ランフォンは契約したただの狼という設定だ。

で、私が一番危ないから偽名を使うことになった。

・・・あれ？設定そのまんまじゃん。

「・・・で、フェ・・・ルナ様。忍び込んでどうするんですか？」

「ふえ？ ああ・・・何時もどおりだよ。 皆は気にしないで。」

「「「《？》」」」

自信満々に微笑む私はけっこう謎のようだ。私以外の皆が首を傾げる。

「んじゃーね！ 皆は用意してある屋敷に先行ってて！」

困惑している皆を置いて私は里で賑やかそうなところへ向かって走り出す。

後ろで呼び止める声が聞こえたが無視し——こらユウ。今は『ルナ』だってば。

まあ、皆はきつと別荘で待ってるだろうね。だって魔王^私の命令みたいなものだし、ね。

「さて、動きますか。」

「フェノ様・・・」

ユウがフェノの走っていった方を見ながら呟く。

「だいじょうぶだって！ おちこまないでユウ様！」

レーノが落ち込むユウを見て、明るく元気付けようとする。カイルは「フェノ様ああああ」

と頷垂れていた。レーノはカイルに興味はないのだろう。見向きもしない。

「ううう・・・。」

「げ、げんきだしてユウ様・・・。」

「なっ・・・。」

「なっ・・・？」

「なんで女装する必要があったんですかぁー！！！！？」

フェノは知らない。ユウの絶叫が轟いていたことを・・・。

3話 じょそうです。(後書き)

このままユウは女装したまままで過ごすんです。。。
・・・どんまい？

4話 かいるですか？

「あー！ルナちゃん！」

「ルナちゃん！この前はありがとうね！」

「昨日振りだね。」

「実は今日もお願いが……。」

「どう！？このおやつ食べてみない！？」

どこかで見たとような光景をたいして気にせず、にっこりと微笑み返して答える。

「今日もこんにちわ皆さん♪」

私が相手にしているのは何時もの魔族の人たちではなく、バンパイアの人たち。

魔族よりも人間に近いバンパイアでも、魔王である私の魅力には無意識に反応している様だ。

まあ、私の人柄がいいからだと思うけどね。

この隠れ里へ来て一週間。私はただ里の人たちと話をしていた。それだけで皆は私を受け入れ、大切な仲間の一人と認識したのだ。

……もっと警戒されると思っていたんだけどな……。

そう疑問に思いつつも、内心、仲よくなれてよかったと思う。
もともと、仲良くなるのが計画だったとしても……。

「……そういえば魔王様ってよく聞くけど、どんな人なの？」

今まであえて聞かなかったことを聞くことにした。

情報収集のために……。

「魔王様？ さあ見たことないし……。でもいい人だって噂は
聞いてるよ？」

「へ？」

私の間拔けな声が出た。

……バンパイア全員が私を認めないんじゃないかなかったか？

「どうしたのルナちゃん？ 急に黙り込んでしまって……？」

「え……。と。皆は魔王様が好き……。？」

少し的外れな質問をしてしまうが、その質問のおかしさに気付く
者は居ず、普通に答える。

「見てみないと分からないけど……。まあ好きだよ？ 何ていう
か……。考えようとしても、
何故か、悪いように思えないし、むしろ安心する、っていう……。

「？」

「あ、確かに。どうしても魔王様を悪いように思えないんだ。会った事もないのに……。」

「そういえば私も。」

魔王についての話で同意する者たちがガヤガヤと騒ぎ出す。

……意味分かんないんですけど？

え、何？ 私ってどういう存在なわけ？

困惑していると一人の14歳ぐらいの少女——サーナリアが話しかけてきた。

「ね、ルナちゃん！ お願いがあるんだけど……。」

「……どうしたのサーナリアお姉ちゃん？」

「もう！ サーナでいいってば！ ……と、お願いだったわね。あのサルナちゃんとこの従者に『カイル』っていう従者が居るでしょ？」

「……ああ（あの馬鹿か）、うん。居るよ？ それがどうかしたの？」

「あのさあのさ…… 紹介してくれない？」

「……んー？」

「だから『カイル』っていう美形さんを紹介してほしいの!」

サーナリア・・・君って人は・・・なんて不幸なっ!

「いいよ。」

心の中で同情しながらも即答でOKする。

勿論、にっこりと微笑んで。

ああ・・・二人の愕然とした顔が思い浮かぶようだっ!!

ふふ・・・

「ふふふふふ・・・ん? どうしたのサーナリアお姉ちゃん?
吃驚したような顔して・・・。」

「え・・・や、別に? (ルナちゃんが黒い笑い方をしていたな
んて言えない・・・) (汗)」

「ふう〜ん? まあいいや♪」

私の満面の笑顔に見惚れつつ、一歩退いたサーナリアを、私はよく分からなかった。

4話 かいるですか？（後書き）

まさかのカイル（笑）

ほんとは全然出す気がなかったりしたカイルです。。。

5話　こくはくです。

「・・・でルナ様。　何で僕達はこんな所に？」

やっと私の名前を間違えずに言える様になったユウが小声で呟く。

「決まってるでしょ？　こんな面白そうなものを見ずにどうする！？」

私は感情を高揚させ、私達の先にある光景から意識を外させずに小声でまくし立てる。

「・・・きょうみない。」

《・・・我もあまり興味はないのだが・・・。》

「もう！　ノリ悪いな。レーノもランフォンも！こんな面白そうな展開なのに・・・勿体無い。」

何が勿体無いんだか・・・と溜息を吐くユウはほって置いて、私は再び意識を一箇所に集めた。

＊ ＊ ＊

「・・・」

お互い無言のまま時間が経っていく。

は、早く話し出さないと・・・でも・・・なんて話し出せば・・・！？

今更になって慌てだす私を、彼は不思議そうに見ていた。

ああ・・・なんでもっと準備しておかなかったんだろう・・・。

「・・・あの？」

「はっはい！？」

沈黙の中でのいきなりの声に反射的に答える。

「ルナ様が貴方から話があると聞いたのですが・・・？」

「あ・・・はい。その・・・。」

「・・・？」

「つ、付き合ってください！！」

＊ ＊ ＊

「・・・言ったわ・・・。ついに！ ふふふふふ！」

「ま、まじですか・・・。」

「ほへへ？」

《・・・（黙秘）》

それぞれの反応は異なっていたが私は気にしない。

「これで・・・あの変態から解放される！」

晴れ晴れしい満足しきった表情で私は呟く。

思えば・・・大変だった。

カイルは私に会えないからと言って毎日の様に手紙をよこし、プレゼントを贈ってきていた。

問題は、手紙とプレゼントの内容。

手紙に綴られるのは寒気がするような愛情表現の言葉ばかり。

プレゼントとして包装されているのは進みすぎだろ とつつこんでしまうような結婚指輪や

そういう系のきわどいものばかり・・・。

何度・・・殺^やってしまおうかと思ったか・・・。クウ・・・涙が出そうだ。

だが今日で終わりだ！

カイルは私の前じゃなかったら真面目な優等生キャラ。人の行為を踏み躪ったことはないと聞いている。だからきつとカイルはサーナリアの心を受け取り、くつつくはずだ！そして恋人がいることになるから、カイルはもう私にちよっかいは出さないはず！

私は「よっしやあああああ！！」と心の中でガッツポーズをとる。

だが、私は忘れていた。

確かにカイルは見た目も中身も最高のやつなのだが、私が関わる^{かんわ}と、その仮定は意味を成さないという事を・・・。

「悪いが断る。」

空気を凍りつかせ、私の笑顔も硬直させる声が響いた。

「「へ？」」

真っ先に反応したのは私とサーナリアの二人だけだった。ユウ、レーノ、ランフォンは

『やっぱりな』みたいな悟った顔をして、うんうんと頷いていた。

「な・・・なんでですか・・・？」

サーナリアが恐る恐るとカイルに聞く。

「俺のすべてはルナ様に捧げているからだ！」

・・・なんだって？

え・・・何？　なんか絶望的な言葉が聞こえたような・・・？
まだあれが続くの・・・？

えーと・・・ふっざけんなぁー！！！！

もう一度言う・・・ふざけるなぁああ！！！！

私とサーナリアはそれぞれ違う思いを抱えながら、同時に膝をついて項垂れた。

5話　こくはくです。（後書き）

フェノはカイルがどれだけ執着しているか分かっていたけど
つい忘れていた、と。

ユウ、レーノ、ランフォンはちゃんと覚えてました（笑）

6話 ひがいうとうです。

「カイル……。」

サーナリアが告白し、それを断ったことでサーナリアは複雑そうな顔をして走っていった。

取り残されたカイルに私は話しかけた。不満を隠さずに。

ずっと無表情だったカイルがゆっくりと振り向き――

「ああ！ フェノ様！ お会いしたかったですうー！！」

フニャフニャの笑みをして抱きつこうとしてくる。

ユウが迎撃。

「……この害虫が。」

……ユウ。害虫は流石に……まあいいか。

「……で、何で断ったの？ ……サーナリアの告白。」

「ああ、先ほどの方ですか。・・・言ったでしょ？」

俺は全てをフェノ様に捧げている、と。 勿論本当のことですよ？」

ニコ とカイルが微笑む。

・・・う。やっぱり美形は綺麗だ・・・。性格がどうであろうと・・・。

たじろぐ私を庇うようにユウが立つ。

でもねユウ？ 女装姿できりっ とかっこつけられても面白いだけだよ？

＊ ＊ ＊

「・・・ルナちゃん。」

「・・・は、い？」

静かでどこか寂しそうな声に、想像はしていたけどビクリとする。話しかけてきた相手・・・サーナリアは殺気のこもった視線を隠そうとはしていなかった。

そう！怖いのは嫉妬に狂った女！

とか心の中で思い、現実逃避している場合じゃない！ やばいよ

！　なんか怖いよ！？

「・・・別に怒ってなんかない。うん。別にルナちゃんは悪くない。悪いのは・・・。」

ひい！？　なんかぶつぶつ言い出した！？

「そう・・・悪いのは・・・。」

・・・私、死んだかな・・・？

「悪いのはカイルさんよ！！」

はぁカイルが・・・　・・・って、え！？

「え！？　何でカイルが！？」

予想外の言葉に、だんまりを決め込むことを決めていた私はつい反応してしまった。

口に出してから慌てて口を塞ぐがもう遅い。サーナリアの目がカッと見開く。

「そうよ！　カイルさんが悪いの！　私に思わせぶりな態度をとるから！」

わぁ・・・意味分ない。　てかカイル何したんだよっ！

「・・・いつも見つめているし、よく話しかけてくるし・・・。」

ルナちゃんの話で盛り上がったりもしたわ！他にもルナちゃんよく行く店やルナちゃんと買ったもの、食べたものの話もしたわ！ルナちゃんの行く道を一緒に辿ったり、ルナちゃんの捨てたものを笑いあいながら拾ったりもしたわ！一緒に楽しく行なっていたの！きつと気があるんだと思っていたのに！私も、優しくしてくれたカイルさんに惹かれていたから、いい恋人同士になれると心の底から感じていたのに！」

「・・・・・・・・」

・・・・・・・・？　なんか色々おかしくありませんでしたか？
カイルがサーナリアに気がある様に聞こえるけど、全部私のストーリー
カーの話ばかりでは？

え・・・てか二人ともそんなことしてたの？確かに、よく二つの
気配があるのは気付いていたけど・・・。

あ、後カイルはただ私の情報のためにサーナリアに接触してたの
ね。

なら悪いのは確かにカイルだね。

で、カイルにはお・し・お・き　が必要みたい♪

ああそういえば、サーナリアは次の日にはケロツとして、次の男の話でのろけてた。

まったく……。これだから若い女は……。

6話 ひがいうそです。(後書き)

サーナリアは男好きの被害妄想の激しい女ってことです(笑)

あ、ついでに若い女といっても、

サーナリアは見た目は15歳、中身は30歳くらいです。
バンパイアとしては若いんです。。。

7話 きになるおねがいです。

「ふえ？ 北で暴れているある魔獣を退治してくれ？」

「うん。様子を見てくれるだけでいいんだけど……。お願い出来るルナちゃん？」

肩まであるふんわりとした髪を除けながらバンパイアの女性――レオナが下から目線をお願いしてくる。身長的に私の方が大分低い位置にいるのに。

「……。いいですけど……。なんで私に？」

「だ、だって私忙しいし、ルナちゃんには強い従者がいるでしょう？」

「……。まあ。（私の方が強いけど）」

つまりレオナは、実力的に北の調査を任されたが他にもやらないといけないことがあるので誰かに任せようとした。しかしそれなりの実力者じゃないと不安なので困っていたところ私を見つけた。私の見た目はどう見ても6歳の子どものだが私は貴族で身分が高く、有能な従者が二人もいる。どうせ調査だけだから大して危険ではな

い。じゃあ私でいいや、と。

結構危険な仕事なんじゃないのかよ。

こんな6歳にしか見えない私に頼むなんて・・・。

「ねっ？お願い！ちゃんと報酬は払うから！」

んゝ・・・報酬ねゝ。別に金に困ってないし・・・。でも・・・

「いいよ♪ その仕事、私が引き受けるわ♪」

「ほ、ほんと！？ ありがとう！」

ガッ と手を取り、ぶんぶんと振るレオナ。・・・手が痛い。

「そーいうことなら、今から行くよ？ ユウも近くにいるし。」

「う、うん！ 頼むね！ あ、調査だけでいいからね？ 調査以外は何もしないでね？」

いやに強調されたのには気になるが、まあいいだろう。だって・・・

楽しそうだし？

クク・・・。久しぶりに暴れられるかな♪

不気味に微笑み空を見上げる。

「ユウ、レーノ、ランフォン。行くよ？」

その眩きと共にザツ　と三人（？）が前に現れ、同じように微笑む。

「「《はい!》」」

「ちょっと待て!俺も・・・」さっ、さっさと行くよ。」・・・
「ちょ待って!」

微妙なタイミングで現れた空気を読まないカイルを置いてさっさと走り出す。

チツ・・・。やっぱり変態でも名家の魔族か・・・。追いついて来やがる・・・。

後ろを見て軽く舌打ちし、走りながらランフォンの背に飛び乗る。

ドサツ

「眠い・・・。着いたら起こしてランフォン。」

《ああ。ゆっくり眠れ。》

ランフォンが優しい声色で私の眠りを促す。

私はランフォンのやわらかい毛皮に顔を埋め、心地良く目を閉じる。

私が目を閉じると同時に、ユウの気合の入った声と何かが蹴られ、落ちた音がしたが気にしないでおこう。　うん。

目指すは北の方（詳しくは聞き忘れた）。

どんな魔獣がいるのかな？

そういえば。レオナが「北の方で暴れている魔獣・・・」と言ったとき、

あの黒いもやもやが出てたのはきつと気のせいだよね・・・？

7話 きになるおねがいです。(後書き)

あの黒いもやもや ってあれですよ。あの、最初のやつですよ。。。
・・・そういえばなんていうんでしょう？あれ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6573y/>

魔王はここに

2011年12月26日21時45分発行